

氏名	道宗照夫 みちむねてるお
学位の種類	文学博士
学位記番号	論文博第135号
学位授与の日付	昭和54年11月24日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	バルザック、初期小説研究「序説」

論文調査委員 (主査) 教授 本城 格 教授 御輿員三 教授 岡 照雄

論文内容の要旨

本論文は、わが国における従来のバルザック研究がほとんど『人間喜劇』中心になされたがため、それ以前の著作をも含めた彼の全体像の理解に至っていないことを反省し、全体像の理解には作者の知的形成期、特に二十歳台初期、中期の習作時代の小説の詳細な認識が不可欠であると考え、今日までフランス語で発表されたこの方面の諸研究の成果と、日本語による若干の研究成果とを吸収し、バルザックの全貌を把握するのに役立て、あわせて、わが国におけるバルザックの習作時代研究の大きな空白を埋めるため、彼の初期小説七篇について論述したものである。

論文は、序、本論（第一章——第七章）、結論から成り、第一章から第七章は作者の生前には未発表の二作品と、「青年時代の小説」と称される九作品の最初の五作品、計七作品を執筆の年代順に取り扱った作品論である。論文は全体として、研究対象たる七作品の源泉や成立過程の考察よりも、作品の意義や構成の特色、『人間喜劇』との内的連関の把握に重点が置かれている。

第一章は、バルザックの未完の習作『サヴォナッティ神父の作品』を扱っているが、この作品は初期小説の第一作であるのみならず、彼の以後の小説作品に種々重要な影響を及ぼす原点の意味を有している。この作品の構成に関してバルデーシュが疑問を提出して以来、従来単に『フェルチュルヌ』と呼ばれてきたこの作品が、今日『サヴォナッティ神父の作品』と呼ばれるのがよりふさわしいかの問題をめぐって研究者たちがいかに議論を戦わせて来たか、そしてギーズによって画期的な読み方が提唱されたかの経緯を述べ、筆者もこの見解を受けいれて、『サヴォナッティ神父の作品』を『アガティーズ』『フェルチュルヌ』の順序で分析している。筆者はこの作品の歴史的背景、作者の唯物論的世界観と反宗教思想、社会思想、文学思想と小説技法、特に登場人物の配置に見られる特色を詳しく検討した後、この作品が哲学思想と歴史小説とを結びつけようと試みられて成功せず、放棄されるに至ったと主張している。

第二章では、やはり未完に終わった書簡体小説『ステニー』が取り上げられている。筆者はまずこの小説がその形式、人物設定、理想主義的な恋愛という主題などから、ルソーの『新エロイズ』の影響を受けた作品であると同時に、作者の伝記的事実が含まれている点で作者の一種の私的小説であり、思想的な追

求の深さから見て一つの哲学的・思想小説でもあることを指摘し、またバルザックの人間観が一方では現実の結婚制度や社会慣習への批判へ向うとともに一種の虚無思想へと傾き、他方では人間の夢や魂や意志を唯物論的に理解するなど、これらの思想的影響は後年にまで及ぶことを論証している。

第三章においては、バルザックの「青年時代の小説」の第一作『ビラーグの跡取り娘』が検討されている。この作はバルザックがローヌ卿の筆名でヴィエレルグレと共著の形で発表されたが、実質的執筆者がバルザックと考へることを論じた後、筆者はこの小説が作者の古典的教養と暗黒小説の影響のもとに生れた作品であるが、作者はこれを自己流の暗黒小説に仕上げるべく、従来の同種の作品に見られる超自然的な特徴を除去し、陽気な人物を登場させ、対話の重要性に注目し、さらに場面転換の技法と人物の性格と配置に留意した結果、この作にはいわば真の主役が存在しなくなり、かえって脇役により重要な人物が登場するという、以後のバルザック作品の大きな特色の一つが早くもここに見られるだけでなく、『人間喜劇』の後期の作品にまで種々の影響を及ぼしていることを指摘している。

第四章では、バルザックがやはり実質的執筆者とみなされる作品『ジャン・ルイ』が取り上げられている。この小説は前作『ビラーグの跡取り娘』に比して色調が明るく、そこに見られる滑稽味や風俗小説的特徴と相まって、明らかに作者が前作の暗い雰囲気からの離脱を目指しているが、一方意外にこの作品は主役の運命の波瀾、人物の誘拐、毒殺、身元の認知などのテーマに暗黒小説の骨組みを宿していることが詳論されている。

第五章は「青年時代の小説」中、バルザックの最初の単独執筆作品『クロチルド・ド・リュジニョン』の研究である。筆者はこの作品が歴史小説であると同時に騎士道風恋愛小説であり、特にスコットの影響を受けながら、バルザックは時代の好みに合せてそれを越えようとし、さらに歴史に立脚しながらそれに拘束されない小説を書くために、想像力を重視し、登場人物と場景の典型を創造する意図をもって実現に当たったが、この段階での作者の技倆では、歴史小説と恋愛小説をうまく結びつけるまでに至らなかったとしている。

第六章では、「青年時代の小説」の第四作『アルデンヌの助任司祭』が検討されている。恋愛小説であり、風俗小説でもあり、波瀾の多い小説でもあるこの作品において、作者のこれまでのどの作品よりも現実感が濃厚に感じられる。自然の環境で育った青年主人公がパリに出、そこに法の世界、社会を発見し、恋と社会の法との間で真剣な悩みを経験すること、一方作者はこの作においてはじめて、『サヴォナッティ神父の作品』以来断片的に扱って来た、既成の権力への反抗の思想と権力への志向、そのマキャヴェリスムの実践者を具象化するに至ったこと、女主人公の像はまだ弱く、その点恋愛小説としては問題を残しているが、恋愛と宗教との関係において、宗教的抑制が一時的に優位を占めるが、結局は人間性の勝利に終るなどの問題が詳論されている。

第七章においては、前作とほぼ並行的に書かれた『百歳の人』が取り上げられている。この小説はマチュエリンから大きな影響を受けた、超自然的で幻想的な暗黒小説風の作品であり、挿話小説でもあるが、作者は一方でこの物語を帝政時代の現実に基盤を持った、青年将軍と共和主義者の娘との恋の物語として描いていて、作品の有するこの両面の結合に苦心すると同時に歴史的事実と挿話との結びつけに新しい技法が見られること、作品の特に後半において強調される作者の長寿思想と生命哲学に『人間喜劇』におけ

る「哲学的研究」の前史が見られる一方、この作品の暗黒小説の特徴と現実主義の特徴の両面に原理的、思想的な裏付けを与えようとして、恋愛小説としては弱体化したこと、バルザックはここで新たな恋愛小説を書くために、一つの転期に立たされるに至ったことなどが論じられている。

そして結論として、以上取り上げた七作品の考察によっても、『人間喜劇』を湖にたとえるなら、『サヴォナッティ神父の作品』をはじめとして習作期の諸作品はその上流の川であり、不可欠の水源であることが明らかにされたと述べている。

なお副論文三篇が提出されており、第一副論文においてはバルザックの「青年時代の小説」のうち、筆者が主論文で取り扱うことのできなかった残り四作品中の『最後の仙女』『アンネットと罪人』『ヴァン・クロール』の三作品についての、第二副論文では、最後の一篇『破門された人』についての考察がなされ、第三副論文においては、『人間喜劇』の最大の特徴の一つであり、『人間喜劇』の世界の理解に不可欠な人物再現法の特徴の解明がなされている。

論文審査の結果の要旨

フランス本国を中心とする近年の世界的なバルザック研究の趨勢は、いわゆる「青年時代の小説」をはじめとする彼の習作期の作品を、後年の『人間喜劇』小説群が成立するための不可欠の段階、あるいは習練過程として把握することに向かっている。しかしながら、ひるがえってわが国を見ると、バルザック研究のほとんどが『人間喜劇』中心にとどまり、「青年時代の小説」を包括的に考察した研究はこれまでのところ皆無であるというのが実状である。

筆者は本論文において、いうまでもなく約九十篇にのぼる膨大な『人間喜劇』の深い理解に立って、上述のわが国におけるバルザック研究に認められる欠陥を是正し、彼の全体像の把握に努めるべく、バルザックの生前には発表されていなかった二作品と「青年時代の小説」（九作品）中の最初の五作品、計七作品を対象とし、執筆年代の順にしたがって、それらひとつひとつについて、バルザックがそれまでに創造してきた事柄を継承している面と新たに開拓した面との両面から考察を進めながら、各作品の本質的な性格、包含する思想、人物像、構成の特色、『人間喜劇』との思想的・技法的連関および小説家バルザックの成熟過程において、各作品がもつ独自の意義を総合的に究明しようと努力し、それに成功している。

筆者が立論の対象としたバルザックの習作期の小説のうち、作者の生前には未刊行の習作『サヴォナッティ神父の作品』に関しては、テキスト確定の問題が、またヴィエレルグレとの共同執筆作品『ピラージュの跡取り娘』と『ジャン・ルイ』については、実質的執筆者の確定の問題が、それぞれ重要な研究史的課題となっているのであるが、筆者はフランスにおけるバルデーシュやプリューにはじまる甲論乙駁の諸研究をよく批判的に摂取した上で、自己の立論を進めており、その点で筆者の論述はひとを説得する力をもっているといえよう。

さらに副論文においては、バルザックの「青年時代の小説」のうち、主論文で扱われなかった残り四作品の技法上の特色、主題、登場人物の問題などが検討され（第一、第二副論文）、最後に「青年時代の小説」の模索を経て、やがて『人間喜劇』のなかで開花する人物再現法というバルザックの独創的な手法の特色が解明され（第三副論文）、主論文の理解を助けている。

しかしながら、本論文には、なお望むべき点が二、三あげられよう。本論文（主論文・副論文）が対象としたテキスト以外に、バルザックは多くの失敗した小説の断片群を残しているのであるから、小説家バルザックの成立史を問題にする以上、これらの断片群への言及があることが望ましかった。

さらに筆者は、「青年期の小説」のうち、『百歳の人』までしか主論文の範囲に入れていないのであるが、主論文のなかではこの限定の理由が必ずしも明確にされているとは言い難い。序説においてその理由が詳細にのべられることが望ましかった。

最後に、筆者は「青年時代の小説」に属する諸作品の思想的・技法的特徴と『人間喜劇』との関係の解明を本論文の主要な目的としているのであるが、ただその解明の仕方が、各作品について論議されている問題ごとにそのつど言及されていて、必ずしも系統的に整理されているとは言い難いであろう。しかし筆者は本論文のなかで、これらの弱点に自ら言及しているのであるから、われわれは筆者の今後の研鑽に期待したい。

本論文を全体として見る時、その意義は筆者自らが語っているように「これまでの諸研究を吸収し」、「その総合を試み」た点にあり、ある意味からいえば筆者独自の寄与としてこれらの碩学、先達の業績に付加しうるものは必ずしも多大であるとはいえないかもしれない。しかしながら、これまでのフランスの個別的な諸研究をよく批判的・系統的に整理吸収し、それらを総合した筆者の多年にわたる努力の成果は高く評価されるべきであり、特にわが国において従来未開拓であった領域に最初の本格的な接近を試みたという点において、小説家バルザックの成立史の研究に資するところ大であると考えられる。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認められる。